

巻頭言

「ポスト新型コロナウイルス」（その2）

理事長 新谷友良

緊急事態宣言が解除されました。東京都ではステップ0から3までの日常生活復帰のロードマップが作られていて、この原稿を書いている時点ではステップ1に進んでいます。学校が始まり、デパートも開き始め、3月から2カ月以上続いた外出自粛が漸く緩和されつつあります。そのような、不要不急の外出を控えるという「外出自粛要請」でしたが、私たちの体と心に想像以上のストレスをもたらしている印象があります。

長い自粛の中で、三木成夫という解剖学者の書いた「生命とリズム」を読みました。そこでは、「生命の形態で見ると、光合成という能力をもつ植物は、植わったままで生を営むのに対して、この能力を欠く動物は動き回って草木の実りを求めなくてはならない。」と書かれています。また、「成長繁茂・開花結実という生過程にのみ結ばれた植物の性能は、動物においてはさらに餌と異性に向かう個体運動にまで結ばれる。」そして、「人のからだに植物的ないとなみと動物的ないとなみが識別される。」と書かれています。

ウイルス感染拡大防止のために求められる行動の制限ですが、動物・人間の生来のあり方に対する根本的な制約なので、人や人が作る社会にもたらす影響は大変広く、深いものがあるような気はします。就労の分野においては、テレワークが非常に勢いで普及しています。会社に集まらなければできないと考えていた多くの仕事が在宅で可能となり、却って仕事の効率が向上する事実や、通勤時間の削減による個人の自由時間の拡大・環境への負荷の軽減など、さまざまなポジティブな面が指摘されています。そしてこの流れは、教育面では遠隔教育、医療面ではオンライン診療といったように、社会生活のいろいろな分野に拡がりを見せています。

その一方では、社会的距離をとることが「新しい生活様式」とされ、人と会い、握手し、あるいはハグするといったことを控えることがいわれます。このような対応は、感染防止のための一時的な生活様式でしょうが、コロナ感染が長く続くようであれば、生活慣習として私たちが取り入れる可能性があります。パンデミックの歴史は、社会に大きな変革をもたらしてきましたが、今回の新型コロナウイルスが、そのような植物・動物・人間を分かち根本的な生活様式の変革を迫っているとすれば、with コロナの社会は想像を超えた新しい社会なのかもしれません。